

— 【リモートで被爆体験を聞く】 —

2020年9月30日、図書館企画【リモートで被爆体験を聞く】を開催しました。体験をお話下さるのは、広島で「胎内被爆」を経験された濱住治郎さんです。「胎内被爆」とは、お母さんのお腹の中にいて被爆されることです。濱住さんは、日本原水爆被害者団体協議会事務局次長や東京都原爆被害者協議会の副会長を歴任され、NPT（核不拡散条約）再検討会議（2015年）ではニューヨークを訪れ国連ロビーでの原爆展や周辺の学校などで被爆者として証言をするなど世界の非核化に向けて精力的に活動されている方です。

今回の企画に際しては、本校の卒業生の保護者でもあるご縁に甘え、ご講演をお願いしました。これからご覧いただくものは、約1時間にわたる濱住さんのお話の一部と、その時の資料です。濱住さんのご活動の根底には写真でしか知らないお父様への思いがあります。ご覧いただき、考える材料にしていいただければ幸いです。

濱住 治郎さんの話を聞いて・・・

濱住さんのお話、いかがでしたか。実際には質疑応答を含め1時間ほどのものでした。お話を聞き終わった私は、濱住さんのご用意くださった資料の最終ページをじっと見つめていました。青空を背景に男の子とそのお姉さんと思われる女の子が、楽しそうに折り鶴に乗って風を切って飛んでいる絵です。この絵の意味がゆっくりと胸に迫ってきているように感じたからです。

濱住さんのお話を私なりに振り返って見ました。

「私は今年74歳になりました。被爆者の中では最も若い世代です。一口に被爆者といいますが、直接被爆された1号の方、原爆投下後2週間以内に広島に立ち入った2号の方、被災者の救護などに当たられ被爆された3号の方、そして1～3号の方の胎児であった胎内被爆者、私はこの胎内被爆者に当たります。状況によって体験の内容も異なります。私は私の立場からお話したいと思います。」濱住さんの口調はゆったりと穏やかだ。しかしそこには芯の強さがある。その強さは一体どこからくるものなのだろう。誰でも自己の体験はかけがえのないただ一つのものだ。過剰に重視して当然なのだ。しかし濱住さんは違った。人により異なる語りがあることを冷静に捉えている。唯一ではあるが絶対ではない。この慎みこそが濱住さんの強さなのではないか。濱住さんは理性の人である。

1945年8月6日8時15分、濱住さんはお母さんの胎内にいた。爆心地から4キロ。実家広島市矢賀町である。お母さんは娘さんと一緒に、7~8日、お父さんを探しに出かけた。お父さんは爆心地から500メートル近くの会社で被爆、焼け跡から見つかったものは、お父さんが身につけていたベルトのバックル、がま口の金具、そして鍵の3点、いずれも焼けたされたものであった。享年49歳。濱住さんはお父さんの姿を写真でしか知らない。この3点の遺品はお父様の骨壺（遺骨はない）に収められている。

「母親の胎内にいたのだから大丈夫でしょうと思う人がいるかも知れませんが、若く無防備な細胞ほど大きな影響を受けることがありますのです。」濱住さんの話は、自分と同じ境遇に生きた人たちのことへと移っていった。「原爆胎内被爆者全国連絡会」が結成されたのは2014年のこと。そこで知り合った方たちから大きな影響を受けたと言う。「戦争という悲劇を繰り返さないためには教育が大事だといって教師をしていたある方は、40歳で亡くなりました。『胎内被爆者は生まれる前から被爆者としての烙印を押されている』とは、その人の言葉です。関西に住んでいた方で、この方との出会いは大きなものでした」と語る。静かに濱住さんは続ける。「今の自分は父に代わって生かされている」と。同じような境遇の方々、若くして亡くなっていく中で、濱住さんは自己の命と日々どのように向き合ったのだろうか。お父さんが亡くなった49歳と同じ年齢になったとき、きょうだい5人に手紙を書き、濱住さんが知らない8月6日の体験をつづってもらった。「父に代わって、生かされている」との思いは、そんな体験の中で濱住さんの心の中に形作られていったものではないか。自己の存在理由と厳しく向き合わねばならなかった境遇、濱住さんは、紛れもなくそんな境遇の中に生を受けた方々のお一人なのである。年間、約9000人の被爆者が亡くなる。被爆者の平均年齢は83歳、残された時間は少ないという。

「まずはお父さん、お母さんといった身近な人達の話聞くことから始めてみてはどうでしょう。聞くことは入口です。親が戦争を体験しているかどうかは関係ないと思います。そしてお爺さん、お婆さん、親戚の人たち、さらに地域の人たちへと広げていってはどうか。」濱住さんの話は、教員から寄せられた質問の回答へと移っていった。「戦争を語り継ぐとは?」「平和学習のあり方は?」「日本の役割とは?」様々な質問に対し一つ一つ丁寧に紡ぎ出されるお言葉は、どれも現実的で、決して無理な背伸びはしていない。高校生であれば実行可能なものばかりだ。そして一貫して「自分のこととして考える」を大事になさっている。冒頭の引用はそのための具体的方法である。一見遠回りに見えるが、話を聞く側の心つまり入口が整っていなければ深いところでの共感はいえぬ。共感のないところに想像力は働かない。単なる知識で終わってしまう。ここに濱住さんの危惧がある。そしてその上で、様々な団体がどんな思いでどんな活動をしているのかを知ってほしいと濱住さんは続けた。

「核兵器は非人道的な兵器です。人として生きることも死ぬことも許さない。そして今な

お人々を苦しめ続けている。被爆者としては謝ってほしいという気持ちはあります。しかし報復の連鎖は貧困を生み、憎しみを増幅します。本当に大切なのは二度と核の被害者を出さないこと、核兵器は今、世界で 13,400 発あります。核兵器もない戦争もない青い空を子どもたちに届ける、それが父に代わって生かされている私の、全世界の大人たちの使命ではないでしょうか。」

短い時間であったが、濱住さんの声は終始穏やかであった。資料最終ページの絵に込められた濱住さんの思いは深い。金色の鶴に跨り青空をかける姉弟、この子達に青空を贈るために濱住さんたちは長い間地道な活動を続けてきたのだ。この思いに次の世代がどう答えるか。大きな課題を頂いた 1 時間であった。

講演をとおして感じた濱住治郎さんとは、静かな中に強い信念を持ち、辛い人生経験を経ながらも寛容さを失わない、どこまでも未来志向の人である。

NPT (核兵器不拡散条約)とは～外務省 HP より引用

(ア) 核不拡散：米、露、英、仏、中の 5 か国を「核兵器国」と定め、「核兵器国」以外への核兵器の拡散を防止。

(参考) 第 9 条 3 「この条約の適用上、「核兵器国」とは、1967 年 1 月 1 日以前に核兵器その他の核爆発装置を製造しかつ爆発させた国をいう。」

(イ) 核軍縮： 各締約国による誠実に核軍縮交渉を行う義務を規定 (第 6 条)。

(ウ) 原子力の平和的利用： 右は締約国の「奪い得ない権利」と規定するとともに (第 4 条 1)、原子力の平和的利用の軍事技術への転用を防止するため、非核兵器国が国際原子力機関 (IAEA) の保障措置を受諾する義務を規定 (第 3 条)

…しかし、2015 年 NY における NPT 運用検討会議においては、実質事項に関する合意文書を採用することができなかったが、核兵器の非人道性の立場から法的な枠組みをつくる作業部を立ち上げることを決め作業を進めていった。

世界の核兵器への動き～2017 年 7 月に国連で 122 ヶ国の賛成で、核兵器を国際法上違法とする核兵器禁止条約が採択されました。それから 3 年半が経った今年 10 月 24 日に 50 カ国が署名、批准して、90 日後の来年 (2021 年) の 1 月 22 日に条約が発効することが確定しました。

(日本政府による暫定的な訳は <https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000433139.pdf>)

この条約に世界で唯一の被爆国である日本は参加していません。日本政府は外務省の HP でこのようなメッセージを発信しています。

『日本は唯一の戦争被爆国であり、政府は、核兵器禁止条約が目指す核兵器廃絶という目標を共有しています。一方、北朝鮮の核・ミサイル開発は、日本及び国際社会の平和と安定に

対するこれまでにない、重大かつ差し迫った脅威です。北朝鮮のように核兵器の使用をほめかす相手に対しては通常兵器だけでは抑止を効かせることは困難であるため、日米同盟の下で核兵器を有する米国の抑止力を維持することが必要です。

核軍縮に取り組む上では、この人道と安全保障の二つの観点を考慮することが重要ですが、核兵器禁止条約では、安全保障の観点が踏まえられていません。核兵器を直ちに違法化する条約に参加すれば、米国による核抑止力の正当性を損ない、国民の生命・財産を危険に晒（さら）すことを容認することになりかねず、日本の安全保障にとっての問題を惹起（じゃっき）します。また、核兵器禁止条約は、現実に核兵器を保有する核兵器国のみならず、日本と同様に核の脅威に晒（さら）されている非核兵器国からも支持を得られておらず、核軍縮に取り組む国際社会に分断をもたらしている点も懸念されます。

日本政府としては、国民の生命と財産を守る責任を有する立場から、現実の安全保障上の脅威に適切に対処しながら、地道に、現実的な核軍縮を前進させる道筋を追求することが必要であり、核兵器保有国や核兵器禁止条約支持国を含む国際社会における橋渡し役を果たし、現実的かつ実践的な取組を粘り強く進めていく考えです。

現在の日本の核兵器についての向き合い方

軍縮・不拡散に対する我が国の取組～日本は唯一の戦争被爆国として、「核兵器のない世界」の実現に向け、国際社会による核軍縮・不拡散の議論を主導してきています。日本は、すべての核兵器保有国に対し、軍備の透明性の向上を図りつつ核軍縮措置をとることを呼びかけ、具体的な行動を起こしています。（外務省 HP より引用）』

濱住さん達のメッセージと合わせて、あなたはどんな考えをもちますか？自分事で考えてみましょう。